

## 自分らしく生きる

社会福祉法人 水仙福祉会  
生活介護事業所 ワークセンター豊新  
支援員：川畑優

入社してまもなく11年を迎えようとしている私は、Aさんに出会い担当となってからも、もうすぐ11年。今日の研修では、その11年間のエピソードの中から、私とAさんの関係性がどのように変化していったか、そしてAさんの生きてきた人生とこれから歩いていく未来について思いを巡らせたいと思います。

### 【背景：Aさんと支援の歩み】

Aさんは障害区分6、A判定の療育手帳を所持されています。Aさんは3歳の時に自閉的傾向と診断された時から、ご両親は様々な専門機関を訪ね、「早い時期から集団に入れた方がいい」という助言のもと幼稚園に通いました。小・中学校は地域の学校へ、高等部より養護学校へ通学。ご両親はAさんのことを大切に想っておられ、将来困らないように、といろいろな経験が出来るように一生懸命に関わってこられ、地域のブラスバンドに参加したり、体操教室や言葉の教室に通っていました。一方家では、「お風呂に何度も入る」「電気をつけたり、消したりする」という行動が始まりました。中学生になると、お母さんの背中を叩いたり、大きな声を上げたり、床に頭を打ち付けるなど、Aさんもご家族もしんどい状況が続きました。高等部3年になって就職が決まる頃には、言葉の教室での指導が厳しくなり、言われたとおりにできないと足が青く腫れあがるほど叩かれてしまいました。高等部卒業後、お母さんが見つけてきた近くの工場に就職。しかし、同僚との人間関係が難しくなり、次第に帰宅後に大声を出したり、眠れない、暴力などが出始めたために1年10ヵ月で退職。その後在宅で過ごすも、自傷・他害が激しく毎日がパニック状態だったとのことでした。そんな中、福祉事務所に相談し退職2ヶ月後より当法人の通所更生施設（現在は生活介護事業所）「風の子そだち園」へ通うことが決まりました。

風の子そだち園の通所を始めた頃は、作業や集団でのプログラムに参加していましたが、作業を始めるとイライラした様子で、「(作業を)するの、しないの」と大きな声で繰り返し、自傷行為や職員への暴力が出るようになりました。「作業をやめてもいい」、「無理に仕事をしなくてもいい」と話すも、「するの、するの」と言って作業を続け、目の前にある作業をすべて終わらせないとやめられず、自傷行為や他害、衣服を破るなどの激しい行動が増えていきました。職員が「嫌なことはしなくてもいい」ということを繰り返し伝

えていく中で、作業をやめる時も出てきました。そうした葛藤状態の末、ようやく「したくない」という表現も言えるようになり、そのうち和室に入って「寝てるの」と言って布団をかぶって過ごすようになりました。それ以降施設ではほとんどの時間を寝たままで過ごし、作業を含め何もしない状況が続きました。しかし一方で、Aさんは過去の出来事をぼつぼつと話し始めたのです。ワークセンター豊新に移ってから3~4年の間は、Aさんや家族、職員にとっても一番難しい時期となりました。毎日長時間何度も風呂に入って床が水浸しになってしまったり、台所のテーブルの周りをひたすら走り、椅子をひっくり返したりお母さんのことを叩くなどしんどい時期を過ごしていました。その頃は、お母さんからのSOSの電話が何度も入るほどでした。お母さんは今でも「あの頃先生たちには本当に支えてもらった。もしあれがなかったら、あの子を道連れに、私はどうかなっていたと思う」と話されていたのが印象的です。

そうして先輩職員たちは、Aさんの思いを受け止め続け、その中で何度も迷い考えながら支援を重ねてきました。そして次はAさんのこれからの未来をどう描いていくのかその問いのさなか、私が水仙福祉会に入職した2010年の春、Aさんに出会いました。出会った頃は社会人1年目で人としても未熟すぎる私でした。Aさんも少しくまういかなかっただけでパニックになるほど自己否定感が強く、未来に向かって前進していく姿とは程遠いところにいたように感じます。傷ついてきた心は、信頼関係がない私と一緒に活動するにはとても脆く、すぐに壊れてしまいそうでした。そこから4年経った頃から、自分自身の心が大きく動いた瞬間に私はAさんとのやりとりをエピソード記述で記録に残してきました。それらの出来事から、私とAさんの関わりを辿っていきたいと思います。

#### 【エピソード1：いちご狩り】（詳細は参考資料1に掲載）

わたしが入職して5年目の頃、まだAさんは横になって過ごす時間が長くありました。初めの頃の緊張感は和らいでいったのですが、といてもこちらの働きかけがないとAさんはずっと横になっていることに変わりはありませんでした。そんな中、どのように信頼関係を築いていけばよいか何度も悩みました。腫れ物に触るかのような自分の関わりには嫌気がさしていたころ、どうにか前に進みたいとわたしはAさんを畑の活動に誘ったのです。しかしAさんの気持ちを十分に確認しないまま進めてしまい、思いが伝わらない状況が続きました。その後時間をかけてAさんと話が出来て、お互いの思いを確かめ合うことができました。そしてこの先のエピソードでも大切になってくる『相談して決めたい』というAさんのメッセージを受け取った、私にとっては大切なエピソードでありました。

## 【エピソード2：阪急そば】（詳細は参考資料2に掲載）

通院の都合で給食が食べられない日があり、外食を提案する機会がありました。いちご狩りの経験で学んだことを大切にしながら、どうするかをAさんと相談し、一つひとつ一緒に決めていきました。その結果、Aさんはいくつかの私の提案から「阪急そば」を自ら選び、当日も落ち着いて好きなメニューを注文することができました。その姿を見て私自身も心からAさんとの時間を楽しむことができたのです。この出来事は、Aさんが自分で選び行動する力と、それを支える関わりの手応えを感じたエピソードでありました。

## 【エピソード3：自分らしく生きる】

今から5年ほど前の話。わたしが7年目になった頃、世界中でコロナウイルスの感染者が増え、身近にもその影響が広がっていました。感染に対する不安から、Aさんにも自粛生活がはじまりました。Aさんは自宅で落ち着いて過ごされていましたが、世の中では皆、先の見えない自粛期間や将来への不安が大きくありました。公共交通機関での感染のリスクが減ることもあり、“2泊3日宿泊して欲しい”というお母さんの思いも大きくなっていきました。そうしてAさんとお母さんは宿泊について話す機会が増えていきました（この頃は週に1泊ショートステイを続けていた）。うるさく言うと、本人も嫌になるだろうと、お母さんは伝え方や話す頻度を配慮されていました。「ねえ、Aちゃん。〇〇とこのおばちゃん、病気になって入院したんだって。私が入院したり、居なくなったらこの家に住めなくなるよ、その時はどうする？」そう言うお母さんの顔をじーっと見るAさん。しかしAさんからの返事は「2泊3日、ベケ」。「でもAちゃん、いざというとき、お母さん居なかったらご飯はどうするの？お姉ちゃんは仕事で帰ってくるの遅いよ？お母さんやっぱり不安だから、Aちゃんがお泊まり増やして、グループホームに慣れてくれたら安心なんだけどな。ま、決めるのはAちゃんだけだね。」

お母さんは時間をかけていろいろと話していかれたそうです。Aさんはその度によく考えていましたが、返ってくる返事は「2泊3日、ベケ」。お母さんも頑ななAさんに対して、手を焼いているようでした。「もう！本当に、こんなに頑固なのははじめて！誰に似たんだが！」「あの子には負けるわ。やっぱり難しいのかな。」電話口で感じるお母さんの焦りは諦めへと変わっていきました。「家でもあの子にグループホームの何が嫌なのか聞いてみるけど、ハッキリとは返事が返ってこないね。またワークであの子の話聞いてやって。」実は以前にもグループホームについて、Aさん聞いてみたことがありました。「気を遣う」とAさんは言っていましたが、宿泊数を増やしていくことを拒否する決定的な理由ではないように感じていました。毎日お母さんにご飯を作ってもらい、その他身の回りのことのほとんどをお母さんの手を借りているAさん。お母さんのご年齢（80代）やこの先

のことを考えると私も正直焦りました。その後の電話の聞き取りでも、1泊2日を主張するAさん。「もうAには負けるわ。そんなに言うのなら、川畑さんに自分で言って。って言ったの。かわいそうに、あの子ずっと一生懸命考えて」お母さんからのバトンを受け取った私は、Aさんがどんな風に考えているのか知りたいと思い、登園できる日を待ちました。

自粛期間が明け、久しぶりに登園したAさんは、朝からずっと「2泊3日はペケ！1泊！」と訴えていました。しっかりと私の目を見て人差し指一本を立てて言うのです。ずっと考えていたのでしょうか、手の甲には皮をめくった跡が少しありました。私は「ずっと考えてたんやね」と言って、かさぶたのあるAさんの手に、自分の手を重ねました。そうするとAさんも目を閉じて…そうしながら、私とAさんは同じ時間を過ごしていく中で、わたしも自分の中で考えがまとまり、「Aさんの気持ちわかりました。自分で決めたこと、2泊3日はしないこと、わかりました。」そう言うと、「1泊2日！」と言って、Aさんは一瞬だけ表情が明るくなりましたが、またすぐに眉間に皺を寄せて、腕で顔を覆ってしまいました。その後も表情が晴れることはなく、なにか考えている様子。スッキリとしていないことだけは明らかでした。ただ宿泊が増えるのが嫌なら、宿泊したくないことやしないと決めたことをそのまま受け入れてみたらどうかと思いましたが、少しAさんの気持ちとズレていたのでしょうか。それに、グループホームに泊まる日はとても楽しそうに買い物をしていたAさん。また、グループホームのスタッフさんや他の利用者さんと仲よくお菓子を食べたり、悩みを聞いてもらったり、それなりに過ごせている様子を見ると、グループホームも嫌々泊まっている訳ではなさそうでした。ただ泊まりたくないから2泊3日はペケ、と言っている訳ではない…？Aさん自身も自立について自分なりに考え、葛藤があるのだと思い、やりとりを進めていくことにしました。

「どうして1泊2日→2泊3日はペケなのですか？」紙にAさんの気持ちを推測したものを書き、Aさんに見てもらいました。（泊まりが増えるのは負担・しんどい／将来2030年2040年も今の家で暮らしていきたいという強い願いがある／お姉ちゃん（姉）と一緒に姉の家で暮らしたい／泊まりは気を遣う／お母さんのことが心配だから1泊2日がいい）Aさんはその紙を手に取り、しばらくそこに書かれたものを目で追って、私が持っていたボールペンを手に取りました。そしてAさんは声に出して読みながら丸をつけたのです。「今の家で暮らしていきたいという強い願いがある！」「やっぱりそうなんやなあ。他にはありますか？」二番目に「泊まりが増えるのはしんどい。」そう言って丸をつけました。「確かにそうだね。Aさんはお泊まり、ゆくゆくはやめたい？」と聞いてみたが、それは違うようで私の言葉に被せるように「1泊する！」と目を見て言いました。グループホームの宿泊も1泊ではあるが、続けていきたい様子。その後、Aさんから離れて聞いたことを整理していると、Aさんは私の傍に来てのぞきこんだあと、隣の椅子に腰をかけました。こ

んなことは初めてだったので、Aさんの思いが強いことを感じました。その後もいろいろ話していったのですが、“今住んでいる家が好き”というAさんの思いがわかりました。

「“住み慣れた街で、大好きな家で暮らすこと、ここが自分の家、それが幸せ。”それがAさんの幸せであるなら、立派な夢や希望やね。」にこにこ笑いだしたAさん。「でもお母さん、歳を重ねてきて、不安になってはるねんなあ。Aさんもいろいろと考えているだろうから、どうしていこうか一緒に考えよう。」そこであれこれ話す中でAさんが選んだのは、自立のために自分で身の回りのことを練習していくことでした。生活の中で難しいことは、ヘルパーさんの助けを借りられることを話した上で、一人暮らしに必要なこと、洗濯や掃除、料理、食器洗い、電気を消したり、お風呂の準備片付けなど、いろいろあることをAさんと話しました。すると、「掃除する！」と言い、ほうきとちりとりで自室を丁寧に掃除しはじめたAさん。とてもいきいきとした表情で笑っています。これまで何回誘っても断り続けられた食器洗いを、昼食後にAさんが自らし始めました。チャキチャキとこなしていくその姿は本気そのものでした。自分の未来を思い描いて、その夢や希望、目標に向かって、人生を切り開いているのでしょうか。これまでのAさんの半生を考えながら、あたりまえの幸せを大切にしたいと、Aさんが自分のために動くその姿にワクワクし心動かされる私がいまいました。「そうか、Aさん、本気だね。Aさんの希望が叶えられるように、応援したい。」私がそう言うと、Aさんはにっこりと微笑んで私の右手に手を重ねました。

それから家では洗濯が終わると干したり、ご飯の後は食器を洗っているそうで、お母さんから嬉しい報告がありました。お母さんはその姿を見て、「世の中には障がい無くても、自分のことさえ自分でしない人がいるのに、あの子はこの家に住みたいから、こうして健気に頑張っているんやなあ、偉いなあ。普通の人やん。私たちと変わらんね。いつまで続くかわからないけど、いろいろ自分で考えてやってるから少し見守ります。」と私に話してくれました。お母さんの不安な様子が和らいで、明るい声色に戻りました。本当に今の家で暮らしていけるのか、その思いが叶えられるかはわからないし、課題や問題が解決されたわけではない。そしてAさんにとっても決して楽な道ではない。でも、AさんがAさんらしく生きていきたいというその思いがある限り、そこに可能性がある限り、私も一緒に頑張る！と強く感じ、心が打たれたエピソードでありました。

#### 【考察：人との関係の中で生きるということ】

青年期になるまでのAさんは、自分の人生を生きてきたというよりも、指導や訓練が主

流だった時代背景の中で、周囲の期待に応えることを求められ、結果として自分以外の誰かの人生を歩んでいるかのような時間を過ごしてきたように思います。水仙福祉会に入り、支援者との関係性の中で、もう一度生き直すように、少しずつ「自分の人生」について考え始めていったように思えました。その過程の中で私はAさんと出会いました。出会った当初は、否定しない、傷つけないことを優先し、意見をぶつけ合う関係とは程遠くありました。しかし11年という時間の中で、Aさんと私の関係は、少しずつ変わっていったように感じます。

エピソード①のいちご狩りでは、私の「一緒に経験したい」という思いを優先し、Aさんの気持ちを確認しないまま畑に誘い、活動を進めてしまいました。その結果Aさんは困惑し、その思いをぶつけてくれましたが、その後時間をかけてお互いの思いを言葉にすることができました。Aさんは「嫌だった」「つらかった」と自分の気持ちを伝え、私はそれを受け止め、自分の関わりを振り返ることになりました。この出来事は、お互いの思いが真正面からぶつかり合い、初めて深い対話が生まれた経験でした。

エピソード②の阪急そばでは、病院受診という制約がある中で、目的や意図をもって「させる」関わりではなく、Aさんと同じ立場で相談しながら選択を重ねていきました。どこで、何を食べるかを一つひとつ一緒に考え、Aさん自身が選んだ結果としての外食は、Aさんにとっても私にとっても心から楽しめる時間となりました。エピソード①で本音を交わした経験があったからこそ、無理のない、自然な関係性が築かれていたように思います。

エピソード③では、2泊3日の宿泊をめぐり、Aさんはお母さんの不安な思いと自分の望む暮らしとの間で大きな葛藤を抱えていました。その葛藤は、「自立するか、しないか」という単純な選択ではなく、大切な人とどう生きたいかという人生そのものに関わる問いであったように感じます。私は答えを提示するのではなく、Aさんの迷いや気持ちの揺れに寄り添い、共に考える立場で関わることができたのではないかと思います。

これら3つのエピソードを通して、私たちの関係は、ぶつかり合いながらお互いに思いを伝える関係から、相談しながら選びその過程を共に楽しめる関係へ、そして人生の葛藤に立ち会い、ささいな気持ちの揺れごと支え合う関係へと変化していったような気がします。

ここからは最後のエピソードから現在までのお話になります。お母さんは背中への圧迫骨折をきっかけに足腰が弱ってしまい、遠くへ外出することが難しくなっています。生活の中で高いところの物が取れなくなり、届かない物を「取ってほしい」とAさんに頼む場面が

増えました。Aさんはそれに応え、お母さんを助けていました。歳を重ねていくお母さんを目の当たりにし、これまで当たり前だった日常が、そうではなくなっていく現実を、Aさん自身実感していったように思います。そして実は、現在Aさんはグループホームで週に2泊しています。それは“させられている”というよりも、家で暮らしたいという思いに本気で向き合ったからこそ、グループホームで人の助けを借りて生活することも視野に入れることに、Aさん自身が少しずつ納得していったのではないかと考えています。そして「2泊3日にした方が、お母さんが楽できるから」というお母さんからの話もAさんはよく聞いておられ、その延長線上に2泊3日の宿泊があったのではないかと感じます。Aさんは今、身の回りのことを自分のためではなく“お母さんの身体のために頑張ってる”と教えてくれました。これまでの人生で、Aさんは「何もしない」という選択を取ることで自分を守ってきた側面がありました。「Aちゃん、ママも腰が痛いけど頑張ってるんだよ。一緒に住むなら、協力してほしい。」そう前置きされたうえで伝えられたのは、お風呂掃除など、共に暮らしていくための具体的な約束でした。それらは叱責や命令ではなく、「それでも一緒に暮らしたい」というお互いの思いから生まれたやりとりだったのではないかと感じます。Aさんは怒りを感じたり反発したりすることなく、その一つ一つを受け止め行動に移していったようでした。目の前で起こることと向き合う日々は、迷いや葛藤の連続でもあるが、そこに向き合い続けているAさんの姿に、私は心が揺さぶられるのでした。

グループホームから自宅に帰ると、「おかえり。寒かったでしょう。」とあたたかく迎え入れてくれるお母さんの顔を見て、思わずAさんも笑顔になる――そんな話を聞くたびに、“お母さんのいる”この家で暮らしたい、という思いがAさんの中に確かにあるのだと感じています。お母さんから泊まりを増やす提案がされても、すぐに「3泊ペケ！」と拒否するのではなく、時間をかけて考えるAさん。お母さんのそばで、ずっと一緒にいたいという思いが、揺れながらも存在しているのかもしれませんが。一方で、Aさんがこの先、今利用しているグループホームを拠点に暮らしていくことも、選択肢の一つとして持てるよう支援を続けたいと考えています。（グループホームの職員と話す機会をつくったり、好きな料理を作ってもらったり、Aさんと相談しながら地域の店でお茶をしたり買い物をしたりしています。地域のお店の店員さんから「今日もお兄さんに会えてうれしいです。先週は来なかったから心配しちゃいました」と声をかけられ、照れながらも嬉しそうにしているAさん。）『生まれ育った町も好きだし、ここの町での暮らしもいいなあ。』そう思ってくれる時が来たらいいなあ、と思います。

Aさんが、折に触れて口にしてきた言葉があります。それは「自分で決める」という言葉です。その言葉は今思うと、何でも一人で決めたい、誰の助けも借りずにやりたい、という意味ではなかったのだと思います。むしろAさんは、“人との関係の中で”、考え、迷い

ながらも相談し合い納得して選び続けること—そのこと自体を「自分で決める」と呼んでいたのではないのでしょうか。11年という時間の中で、私はその言葉の意味を、Aさんから教えてもらったように感じています。支援とは、その人の歩みの速度や揺れに寄り添いながら、答えを急がず、悩んで迷って考え、共に歩み続けることなのだと思います。その積み重ねの中にこそ、自分の生き方を選ぶ力が育まれ、生きる力へとつながっていくのではないのでしょうか。

人は関わり合いの中で、心が動き、互いに響き合い、学び合う。そうした営みの積み重ねの中に、人は生きるよろこびと意味を見出していくのかもしれない。そんな瞬間に出会ってしまうから、私はこの仕事がどうしても好きなのです。Aさんとの11年間を振り返りながら、自分の人生を生きるTさんの姿を想い、そう感じるのです。

#### 【参考資料1；エピソード（いちご狩り）】

※わたしが入社して5年目の頃のお話になります。

Aさんはさまざまな経過を経て、今（約8年前の当時）は1階の個室でソファに寝て過ごしています。Aさんの部屋の机の上には毎日置いている雑誌があります。大きな見出しには、“お上がごちゃごちゃうるさいぞ”“過去への執着”“絶対に～しなきゃ！”“もんでほしいほどツライ”等、それまでのAさんの過去や、気持ちを表すものであろう週刊文春のページが開かれています。

1年目のときは、Aさんのことをかなり緊張感の強い人と聞いていて、一緒に過ごす時間を大切に少しずつ増やしていく、という関わりから始まりました。といってもAさんはずっと寝ており、その中でどのように信頼関係を築いていけばいいのか何度も悩んできました。そしてどこか腫れ物に触るかのような関わりになっていることに心の中でずっとひっかかりがありました。その後Aさんとショートステイの体験を経験したり、様々なことはありましたが、どうしても浅いかかわりになってしまう自分に嫌気が差していました。

その日私は、畑にイチゴがたくさんなっているのを知り、いちご狩りに行きたい！と思いました。担当しているAさんと他利用者のBさんは毎年畑にきてくれているし、ちょっと楽しい雰囲気です誘ってみたら、2人とも来てくれるかなあ…！そう思い、私はAさんに「Aさん、畑にな、なんかなってるみたいや！Bさんそこにおるから、一緒に行こうと思うねんけど、Aさんも一緒にどうですかー？！」と言った。するとAさんは「行く…！」と答えてくれました。「お！ヤッター！！ほんまに？！嬉しいー！」と私が言うと、「やめとく！行く！…やめとく！…」と言うAさん。（迷っている…）と内心思いましたが、B

さんが外に出ていたこともあり、よし、みんなで行こう！と言いながら玄関先で準備していると A さんも来てくれました。「お！なんかなっているね！とってみよう！」B さんはすでにいちご狩りをしており、私も A さんを誘いました。「ちょっととってみる?!」

「…やめとく。」A さんはそう言って少しの間いちご狩りを見届け、畑の周りをぐるぐる回って次第に遠ざかっていきます。勝手口の方まで行ってしまった A さんを、「A さ～ん！」と呼ぶと、「ギュウニク～!! ブタニク～!!」と言って勝手口の方に消えて行きました。「あっちゃー…」とりあえず B さんといちごを摘み取って戻り、A さんにも「さっきはお付き合いありがとうございました～」とお茶を出しました。A さんはそれを一気に飲み干し、おやつも口に詰め込んで、私にお皿を勢いよく渡してきました。A さんと B さんと畑に行けて、私はとっても嬉しかったのですが、目の前にいる A さんは、眉間にしわをよせ、大きな声で歌っています。「エイチボートービーボートー」「お一つまーみおつまーみー」といながら A さんはイライラして辛そうな顔でした。私はとても悲しくなっていました。心配した先輩職員が声をかけにきてくれ、「川畑さん、A さん、畑から帰ってきた時めっちゃブタニク～って言ってたけど、もう話せた～?!」「知ってます。まだです…（は～失敗してもうた…嫌やなあ…帰る前になんとか落ち着けるかなあ～…）」そのまま先輩職員が少し間に入って来て、いちご狩りに誘った時の様子を聞いてくれたり、A さんが昔経験したいちご狩りの話などを聞いてくれましたが、目を見開きながら怒ったように私を見ていた A さんの表情は変わりませんでした。先輩職員は、「何か嫌なことあったら、A さん、きちんと川畑さんに自分の気持ち話して、スッキリしてから帰ってね」と言って部屋を後にしました。この時は私自身もショックな思いと悔しい気持ちでいっぱいになり、あまり記憶にはないのですが、何度話しても A さんから出てくる言葉は、「行きたくなかった!」「いちご狩り、辛かった!」「言いにくかった!」であったことはノートに記録していました。誘いかけを断りにくい雰囲気はあったと思ったので、ごめんなさいと A さんに謝りますが、私自身納得しておらず、モヤモヤしながら出た言葉でした。A さんも、私も、お互いにモヤモヤした気持ちが晴れた訳ではなかったですが、帰る時間も迫っており、話せるだけ話して電車に乗りました。車内ではお互いチーン…と落ち込んでおり、会話も少なくギクシャクした時間でした。

それからしばらく私は今日のことについて、A さんの気持ちや自分が感じたことなど、悶々と考えていました。謝って、A さんも「嫌だった」、「つらかった」と言ってくれました。でもこのスッキリしない思いはなんだろう？とりあえずこれからの A さんとのやりとりのヒントとなるようにと思い、わたしはいちご狩りのことについて A さんが教えてくれたことを紙に書き、週末に突入しました。その後休日を挟んだり、他の職員が A さんに入ったりし、いちご狩りの時のことは A さんの中で少しずつ整理されていった…？かのように見えたのですが、やはり違っていたようでした。その日私はいちご狩りの一件以来はじめて A さんと過ごす日でした。A さんは朝から「ブタニク～」「エイチボートービーボートー

ー」など、イライラしている時によく出る言葉を話しながら何度もトイレに唾を吐きに行ったりフロアを小走りしてバタバタしていました。話をしてみるけど、お互いピタッとく  
るものはなく、昼食前にはイライラして、汗をかくほど力が入っていました。話したいこ  
とをAさんに言いますが、遮るように「給食、先食べる！」と言い、怒りながらご飯をか  
きこんでいきました。食べ終わるとソファに横になり、壁に貼ったいちご狩りの紙を何度  
もさわっています。「Aさん、何かわたしに言いたいことあるね?」「ハイ!!!」しか  
し、話している間もイライラしたり怒っている様子で、いろいろ聞いても「もう誘われたく  
ない!」「生地並べ!」「いちご狩り嫌だった!」と何度も言うAさん。身体に力が入  
り、拳がとんできそうでした。このときの私の気持ちはという言うと、謝ったのに、た  
だ、一緒に楽しめたかっただけなのに、どうしてこんな悲しい気持ちにならないとあかん  
のや、と悔しい思いでした。少し気分転換をしようと、部屋を後にし、もう一度考えるこ  
とにしました。Aさんはそのソファで、ずっと考えながら寝とくんだらうか?それでAさ  
んの人生はいいんだらうか。本当は誰よりも認められたい!って思いながらいつも過  
しているAさん。私だってAさんに活躍してもらいたいし、やっぱり一緒に色んなこと挑戦  
したい。部屋をのぞくとAさんは腕で顔を隠すことなく考えている様子でした。「生地並  
べ!風の子そだち園!!!」さっき考えたこと、話してみよう。「わたしは、Aさんと一緒  
に、いろんなことしたい。昔のAさんの思いもスッキリできたらいいなと思う。けど、や  
っぱりわからへんこともある。わからへんからモヤモヤするし、イライラするし、エーン  
したい気持ちや!…それはAさんも同じなんやろね。私はAさんの気持ち知りたいとい  
つも思ってるよ。だからAさんも怒らずに、気持ち、教えてほしい。難しかったらお手伝  
いします。」Aさんは顔を覆うことなく聞いてくれている様子でしばらく沈黙が続きまし  
た。しかし、イライラした様子はなくなりました。「Aさん。もう一回いちご狩りの時の話、し  
よう。」Aさんは口を半開きにさせ、何か言おうとしている様子だったので、言葉を待ちま  
した。「…。生地並べ、してた!阪急、アサヒスーパードライ、キリンラガービール、自  
分で決める!!!」

私はうれしく感じました。言葉がただ並んでいるだけのように聞こえるかもしれないです  
が、私には違うように聞こえました。いつも「生地並べ」だけしか言わないAさんが、  
「生地並べしてた」、や、「自分で決める」、その他過去のことを、自分から話してくれまし  
た。どれも聞いたことはあって、こちらが聞くと答えてくれるものばかりであったとして  
も、Aさんも自分なりに考えて伝えようとしていることを感じました。そのAさんの一生  
懸命な姿がAさんらしくて、そんなところも大好きだなあと思いました。ずっと気が張っ  
ていた私は、なんだか可笑しくなってしまう、思わず笑顔になると、Aさんも笑いまし  
た。Aさんが「自分で決める」というヒントをくれたので、私も自分なりに考えました。  
Aさんがよく自分で選んでいる単語を入れながら、紙に書いて思いを聞くことにしまし  
た。「あの時、わたし、Aさんのこと、畑に誘いました。畑に誘われた時のAさんの気持

ちはどれ？」と紙に書き、1つずつ読み上げていきました。①何かわからないけど行ってみよう②行ってみよう！行きたい！③やめときたい、けど、行ってもいい④やめとく。行きたくない。ペンを渡すとAさんは③を読み上げながら丸を付けました。「やめときたいけど行ってもいい！」私は心の中でとても驚きました。④を丸すると思っていたのです。「え？行ってもいいの？」「いい！」「そうか…！わかった！じゃあ…ふたつめの質問です。畑に行った時のAさんの気持ちは？」①いちご狩りは苦手！戻りたい！②いちごはキライ！③畑って言われて行ったらいちご狩り！だまされた！④頑張ってるのに、嫌いないちごだった

すると、Aさんは丸を付けて、私の目を見て、「いちごはキライ！」と言いました。「ほんまやなあ。へへへ、わかってたけど、畑まで誘っちゃった、ごめんね。」「Aさんが、今日もいちご狩りの話をしようと思ってくれたのは、何か他にもわたしに伝えておきたいことがあるから、と思いました。Aさんの気持ちに一番近いものがあつたら○してください。」①どこに行くか、何をするか、Aさんが、自分で決められるようにちゃんと教えて欲しい②Aさんが自分で決めるまで、待っていて欲しい③嫌いないちご狩りじゃなくて、Aさんのこと考えて、誘ってほしい④もう誘ってほしくない、やめとく！

Aさんは私からペンを手に取って、「どこに行くか、何をするか、自分で決めるように！ちゃんと教えて！」と言ってから①に丸を付けました。「してくれた！」「(そうか！そうか！)!!!じゃあ、わたしがイズミヤに誘ったらAさんはどうする？」「行く！」「コーナンは？」「やめとく！」「歩きやったら？」「行く！」「自転車やったら？」「やめとく！」「郵便局は？」「やめとく！」「ハルカスは？」「行く」「阪急そばは？」「行く！」「王将は？」「行く！」「…なるほどね〜!!!教えてくれてありがとう！Aさんの気持ちがよくわかるような気がする！ありがとう！」Aさんも「してくれた！」と言ってぐっと力が抜け、笑顔になったのでした。

#### 【参考資料2：エピソード（阪急そば）】

Aさんが通院している病院の予約時間の兼ね合いで、給食を食べていくには早すぎる時間の出発でした。Aさんにそのことを詳しく伝え、外食を提案する機会がありました。「Aさん明日はどこに行きますか？」「〇〇病院！」「何時からですか？」「11：30！」「給食なんですけど…」「給食（少し不安げな顔）!!!」「そう給食、いつもAさん楽しみにしてると思うんですけど、明日は予約時間が11：30だから、この時間に上新庄の駅についておかないと間に合わへんねん・・・だからお店でご飯を食べるのはどうでしょうか」そう言ってわたしは携帯の画面で乗り換えナビを検索し、Aさんと確認をしました。「ハイ」Aさんもそれを見ると仕方がなさそうな表情。「給食、また月曜日ね！」と言い不安げな様子でした。「そうですね。給食はまた月曜日。それじゃあ今から、一緒に決めよう！」わたしは

そう伝え、どんな方法があるか考え付く限りを A さんと話していきました。「まず、どこで食べるか決めましょうか、天王寺、上新庄、梅田あたりが考えられますね。」A さんも「天王寺！上新庄！」と話してくれださっている。「迷うね！う～ん…上新庄やったら…マクドナルド、ロッテリア、サイゼリア、ガスト、ラーメンフジのさん…」わたしは候補を出していくも A さんからの返事はありませんでした。「あまり惹かれるところは無いですか…。A さんは何が好き？」私の問いかけに対し「中華！」と答えてくれる A さん。「ふむふむ…王将はどうかなあ？うーん他には…あ、駅中のお店とかは？！阪急そばとか」その私の言葉に対し A さんは「阪急そば！」と言いました。「駅近いいいですね！そうしよう！」A さんは初めての場所、阪急そばを選んだのです。病院や初めての場所への緊張を除いては、阪急そばへ行くまでもゆったり過ごしていて、当日は自分で決めた好きなメニューを選んで頼んでいました。わたしはというと、わくわくドキドキがとまらず、A さんとの外食が楽しくてたまりませんでした。A さんもどこか生き生きとしていて自信に満ち溢れていた様子が印象的なエピソードでした。

### 【参考資料 3：阪急そばの後日談】

この頃、外出の誘いでうまく気持ちが伝え合えられなかった出来事がありました。A さんも自転車をひっくり返したりで派手にやったようでした。その時のやりとりや、伝えなかったことは何かを A さんにも聞きました。2人で悩んだ末、自分の気持ちを伝えたいときは皆どうしているか聞いてみよう、ということになり A さんと施設を聞いて回りました。A さんも真剣に聞いたり積極的に話をしてくれていました。その後 2人で部屋に戻り、もう一度うまくいかなかった時のことを 2人で振り返りました。いろいろ話していく中で、A さんがお出かけに誘われたらどうしたいかを聞いていった時に、唯一“やめとく”を上回る選択肢がありました。それは“相談してから A さんが決める”という言葉でした。A さんが自分で決めることを後押しする時、「A さんの人生経験」、「イメージする力」、「思いを伝えることが苦手であること」、これを抜きに考えることはできません。自分自身も誰かとお出かけする時や遊ぶ約束をした時は、何時から遊ぼう、とかどこに行こう、とか交通手段や行き先はこうしたい、という思いがあって、それをするためにどうしたらよいかを知っています。相談し合い、少しずつ一緒に決めていくその何気ない時間も、お出かけの醍醐味です。相手と思いを伝えあうことは大変ではありますが、そこに人生の喜びがあるような気がする…A さんと話しながらそう感じたのでした。